

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部人物編第36話

画家フリーダ・カーロとディエゴ・リベラ メキシコ

成田を離陸して13時間、やっと首都メキシコシティの空港に降りたった。飛行機嫌いには長く辛い時間だった。

31年前の1981年9月、アメリカ出張の折、バスでロスアンゼルスからサンディエゴを經由して日帰りで国境の町ティワナへ入国して以来のメキシコである。今回は家内がメキシコダンスにはまり込み誘われての旅で、いわば牛に引かれて善光寺まわりといった格好である。

メキシコといえば映画で見た西部劇やアカプルコの景観、プロレスラーのオルテガ、テオティワカンのピラミッドを日本の相撲取りがこわごわ登る姿など、断片的なきわめて乏しい知識しか持ち合わせていないが、一方では先入観がない分、見るもの聞くものすべてが物珍しく、終わってみればメキシコの旅は思いのほか楽しく印象に残った。



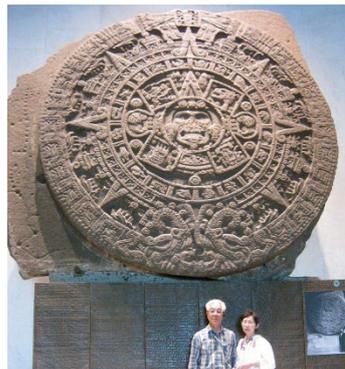
メキシコを代表するピラミッド左からテオティワカン、チチェン・イツァ、ウシュマル

テオティワカンやチチェン・イツァ、ウシュマルで見たメキシコのピラミッドは、エジプトのピラミッドとは異なるが、石組やカーブを描くピラミッドの建造技術には刮目した。コバルトブルーに染まるカンクンの美しすぎる海や神秘的なセノーテ等見どころ満載であった。夜はマリアッチの奏でる旋律を楽しみながらの優雅なディナーなど、思いのほか素晴らしい旅を満喫できた。ビバ・メヒコである。

首都メキシコシティをバスで回っていると壁画を目にする。壁画は文字を読めない民衆に自国の歴史や革命を理解させるために公共の建物に壁画を描き、彼らの意識を啓発しようとしたのである。ガイドからメキシコの歴史について簡単な説明があった。メキシコは紀元前12世紀オルメカ文明に端を発し、紀元前3世紀ごろから6世紀に栄えたテオティワカン、トルテカ文明、13世紀ころにはアステカ文明が栄えた。



神秘的なセノーテ



アステカ・カレンダー



マヤ王のヒスイの仮面

またユカタン半島には3世紀から9世紀にかけてマヤ文明が繁栄をきわめた。1519年スペインのエルナン・コルテスがやってきて、1521年にはアステカの首都を攻めメキシコの様々を破壊し以後300年間もスペイン支配が続いた。

1821年独立を果たすが、アメリカとの国境紛争が始まり、アメリカ側の挑発に乗り戦争となり、首都メキシコシティにまで攻めこまれて、メキシコはカリフォルニア・テキサス・ニューメキシコ・アリゾナなど広大な領土をアメリカに取られてしまった。1848年のことである。

1910年から1940年頃は革命時代と位地付けられている。メキシコの長い歴史は国立人類学博物館に要領よく整理され展示してある。メキシコの歴史が学べる必見の博物館と言えよう。

ガイドの説明にしばしばディエゴ・リベラの名前が出てきたが、メキシコの画家であること以外何も知識が無かった。彼の妻はフリーダ・カーロで彼女も画家である。この説明を聞いてハッとした。家内のTシャツのプリントに顔写真入りでFRIDA・KAHLOとあったことを思い出したのである。帰国してリベラとフリーダ・カーロについて調べてみようと思いをメモをした。



フリーダ・カーロ自画像

帰国後様々な資料に目を通した。彼女の持っている本の中に「フリーダ・カーロ」引き裂かれた自画像堀尾真紀子、中公文庫があったので2度目を通した。

ディエゴ・リベラとフリーダ・カーロは夫婦である。リベラは相撲取りのような巨漢でメキシコを代表する壁画の巨匠であった。

フリーダ・カーロの描く作品はほとんどが自画像で、画集で見ると彼女の作品は決して美しいとは言えず、素人目には奇妙でグロテスクな印象にうつる。それは彼女の背負ったいくつもの苦悩の結果であるのかもしれない。

フリーダ・カーロはメキシコを代表する女流画家である。1907年7月6日メキシコシティで誕生した。父親はドイツ生まれのハンガリー系ユダヤ人でメキシコへ移り住んだ著名な写真家であった。メキシコ人の母親は病弱であったため、彼女は乳母に育てられたが、6歳の時に小児麻痺にかかり右足の成長が止まる大病を患った。

1922年メキシコの最高レベルの国立予科高等学校へ入学するも1925年通学に利用していたバス事故でフリーダは瀕死の重傷を負い、生死の境をさ迷い3カ月間絶対安静の生活を送ったが入院中絵を描いて痛みを紛らわせた。背中や足の痛みの後遺症には生涯悩まされるが、その苦悩は彼女の描く自画像に表されフリーダの画風となっていく。

1928年メキシコ共産党に入党する。すでに名を売っていた画家ディエゴ・リベラに紹介を受け彼に自身の描いた絵を見せ感想を求めた。リベラはフリーダの絵に感銘を受けた。リベラに愛を感じたフリーダは離婚歴もあり女性遍歴で兎角の噂もある年齢差21歳も年上のリベラと結婚する。アメリカから夫リベラに壁画制作の仕事が舞い込み二人でアメリカへ渡る。おりしもアメリカは大恐慌の時代であったが、アメリカの財界の大物たちのパーティにしばしば招かれるが彼女はなじめなかったようである。

メキシコ共産党の要職にあったリベラの無節操な仕事ぶりがけしからんとメキシコ共産党はリベラの党籍を剥奪した。フリーダもこの時一緒に離党している。フリーダは三回妊娠をしたが、事故に遭った後遺症のためにその都度流産してしまい、作品の製作にも大きな影響を与えている。

リベラは写真で見る限り肥満体で美男子ではないが女性にはモテたようでフリーダの妹とも関係を持つなど多くの浮き名を流している。一方のフリーダ・カーロも恋多き女性であったようで、ロシア革命の立役者の一人でスターリンと政権を争ったトロツキーが政争に敗れて国外追放となるが、多くの国が受け入れを拒否していたなか、リベラの熱心な運動もあり、トロツキー夫妻の亡命をメキシコは受け入れた。二人はトロツキー夫妻を彼らの自宅へ住まわせるなどの労を惜しまない援助をした。だが事もあろうにフリーダは当時50代後半であったトロツキーと深い中になった。またある時は日系アメリカ人の彫刻家イサムノグチとも恋愛し関係を持つなど、奔放な二人であった。

1936年スペインで内戦が始まるとフリーダは政治活動に夢中になる。1938年アメリカで個展を開き非常に好評を得て次第に彼女の描く絵に注文が入るようになった。

1939年フリーダとリベラは離婚する。フリーダは生家の通称「青い家」に居を移す。この頃体調がすぐれずサンフランシスコで治療を受け、1940年どうやら日常生活が送れるようになるとフリーダからリベラに条付きの再婚を申し入れをして、一年足らずで二人は再婚を果たし元のさやに納まった。

母国メキシコ国内でもフリーダに対する評価が高まるにつれ、絵を描く以外の活動の幅が一段と増えた。その一つに絵画と造形の学校“ラ・エスメラルダ”の教員にリベラと共に選ばれ生き甲斐を感じ、熱心だがしかし型破りな指導をする。ところが次第に体調が悪くなり生徒が自宅へきて彼女の指導を受けるようになった。

1940年代後半、健康状態はますます悪くなり1950年には足の血液循環が悪く壊死を起こし切断するなどひどい状態のなかであったが彼女を支える唯一の生き甲斐はやはりリベラであった。

1954年肺炎を患い遂に47年間の苦しみに満ちた生涯を閉じた。

フリーダ・カーロは波乱に富んだ人生を送りながら、苦しんだ節目ふしめにその苦しみを自画像に描きこんだ特異な絵を描く画家であった。

1958年彼女が生まれ住んだ通称青い家は没後、フリーダ・カーロ記念館として開館され現在に至っている。

余談 ロシア革命の立役者の一人であるトロツキーはスターリンとの権力争いに敗れ、メキシコで亡命生活を送る。ディエゴ・リベラ、フリーダ・カーロ夫妻が親身になって世話をした、しかし1940年夏スターリンの放った刺客によってメキシコシティで惨殺された。刺客はトロツキーの秘書の恋人を装い嚴重な警戒を突破し凶行に及んだものである。